# なにが問題を解決するのだろう？ 市民参加と税金を秤にかけると…

——その晩、高校時代の仲間に誘われ、ひさしぶりに3人で飲みに行くことになった。

ぼくは、いい機会なので自分の疑問を切り出してみた。

**留萌**「…ということなんだけど、市民参加について、みんなはどう思う？」

**古田**「だいたいそれは役所の勝手な都合だろ。俺たちには関係ないよ」

**飯田**「でも、雪がたまると危ないだろ。それが役所なのか、市民なのかは別として、誰かがやらなくちゃいけないよ」

**留萌**「思いやりとか親切心とかが、昔に比べて無くなって来ているのかなぁ」

**古田**「甘いよ。今の世の中、自分のことが一番で、だれも他人のことなんか考えてる余裕がないんだよ。それは、市民と市役所の関係でもそうさ。自分の時間は大事にしても他人に奉仕なんか…」

**飯田**「でもそれじゃあ留萌はどうなるんだ、ってことさ。留萌は誰のもの？ 誰かにお任せでいいの？ お任せで満足できますか、ってことにならないかな」

**古田**「それが市役所の役割じゃないか。そのために俺たちは納めたくもないのに、税金を納めているんだ」

**留萌**「税金で、すべてが解決するなんて無理だよ！」

**古田**「金が全てだろう」

**飯田**「今までは、そうだったかもしれない。日本の社会のモノサシが経済一本やりだったんだから。でも、これからはそれじゃダメだろう。わたしは税金を納めました。だから、あとは役所で全部やってくださいって預けて。市は市民のために借金を作ってまでサービスして、それで財政難だって…。お金にまかせた結果がこれなんだよ」

**古田**「別に、俺は、なんでもかんでもやれって言った覚えはないし、そんなこと言ってるのは、一部の人間だろ」

**飯田**「その、こっちの一部、あっちの一部が重なりあって、ごちゃごちゃになってるんだよ。でも、ここ数年、留萌でも、市民が自分たちでやってみようって動きが起こっているじゃないか」

**留萌**「確かに、取材でまちを歩いていると、女性グループが留萌の食材でおいしい食べ物を研究したり、お土産を売ったり、イベントを仕掛けたり。リサイクルの活動も、介護保険の認定にならないお年寄りへのサービスの提供もそうだよ。映画の上映会なんかも市民が自主的にやっている。この動きは、男女に限らず、少しずつ確実に増えている」

——話が盛り上がったころ、お店のママが席にやってきた。

**ママ**「ちょっと、いいお話ししてるじゃない。アタシも参加していい？」

**3人**「どうぞ」

**ママ**「この間、お店に来たお客さんがね。『親父の世代は、家族のことも忘れて、仕事、仕事に没頭していた。でも、俺は、家庭が2、仕事が6、社会が2だ。これからは、家庭があっての仕事だし、社会があっての仕事だよね』、ってこんなこと言ってたわ」

**古田**「役所がだらしがないから、目覚めたんじゃないのか！」

**飯田**「きっかけはなんでもいいんだよ。だいそれたことをする必要はないけど、例えば、目の前に落ちているごみを拾うとか」

**古田**「それに公園の掃除か？ 少なくとも、俺はいやだね。ボランティアなんてまっぴらだよ。そんなの、やりたい奴がやりゃあいいじゃないか」

**紙村**「公園と言えば、留萌市の公園や街路樹を管理する予算は、確か7，000万円くらいあるんだ。もし、町内会で近所の公園を管理して、掃除したり、砂場をきれいにしたりすれば、全部じゃなくても、予算は浮くことになるけど」

**飯田**「そうだよ。そうして、浮いた分の税金を減らすとか、または除雪費に回すとか考えりゃいいんだ」

**古田**「金と奉仕を天秤にかけようってのか？ みんな金で解決させるに決まってるさ」

▲「春の息吹を伝えるまつりをもう一度」という、女性市民3人の思いから始まった「萌っこ春待里」

▲毎年恒例となったの「クリーンアップ日本海」には、多くの市民がボランティアで参加している

## 市職員のボランティアは上司の命令から始まった

以前。わたしはボランティアを担当する係で仕事をしていました。

ある日、上司に呼ばれ「市役所職員もボランティアに積極的に参加しなければならない。担当として、よろしく頼むよ」と言われました。

わたしは市内でボランティアをしているグループの会長とも面識があり、「一緒にやってみないか」と言う誘いも受けていたため、仕事として、ボランティアに参加してみました。

わたしがしたボランティアは、「給食サービス」と言って、一人暮らしのご老人の家に食事を運ぶもの。仕事として始めたこのボランティアも、お年寄りとのコミュニケーションやグループの仲間たちとの交流により、回を重ねるごとに楽しさを感じるようになりました。まあ、きれい事を言うようですが、自分なりに社会貢献したい—という気持ちが高まっていくのを感じましたね。

現在はグループの活動に「給食サービス」が無くなったこと、また、仕事の都合で、ボランティアは少しお休みしています。

でも、機会と時間があれば、ぜひやりたい。それが、いまのわたしの素直な気持ちです。

# 萌っこ留びと

あなたは、どう思いますか？

## 私たちが望む、理想のまちとは？ その答えの行方はどこにあるのか

**ママ**「そんな絶望的なこと言わないでよ。自分たちのできることは、自分でやれば、アタシたちの税金が減るってことでしょ。アタシ賛成」

**古田**「それは理想論だよ。今だって、町内会でごみ拾いや草むしりやるだろ。でも、いつも同じ連中がやってないか？ ほかの人はお客さんだもの。でも、町内会費は払ってるからね。自分のまちなんだから、みんなが自分でできることを、お互いにやりましょうって言ったって無理だよ」

**ママ**「できるかもしれないじゃない。そうしてさ、みんな仲良くなって、まちが明るくなって、まちのよさに気づいて、好きになって、ここに住むのが楽しくなって」

**飯田**「それが、家族にも自分にもはねかえってきて」

**留萌**「理想的だ」

**古田**「そんなにうまくいくはずないって！ 第一、みんな関わり合いたいのかね？」

**飯田**「そりゃあ、関わり合わなくてもいいなら、楽でいいさ。争いも起きないし」

**ママ**「人の力を借りなくても生きていけるんならいいけど、でも、みんなどこかでだれかの力を借りて生きてるわけでしょ。お互い様で助け合えばいいのよ」

**飯田**「結局、俺たちが動かなきゃ、本当に望んでいるまちにはならないってことか」

**古田**「本当に望むまちってどんなんだよ。こんなに物がそろって、豊かになって、もういいじゃないか。だいたい、全て役所の都合だろ。財政事情が厳しいから、俺たちの手を借りたいだけだろ。まちだって、このままでいいよ。もう慣れちまってるんだから、みんな」

**飯田**「おい待てよ、慣れるのと満足するのとは違うんじゃないのか。お前だって、満足してないだろ、今の現状に」

**ママ**「やっぱりみんなが満足できるように、いやでもやらなくちゃいけないのよ」

**古田**「それって強制？ 義務？ そうやって結局は無理矢理やらされるんだよ、俺たちは」

**飯田**「そうは言っても、みんなその立場、立場で頑張ってるんだよ。だから我慢しなきゃいけないんだって」

**留萌**「……」

**ママ**「そうよ、あたしだって朝眠いのに、ごみステーションのカギ開けてんのよ」

**古田**「でもさ、誰かにやらされるのって、頭にくるだろ」

**飯田**「そんなのやっているうちに、楽しくなるかもしれないし、好きになるかも…」

**古田**「それは違うだろ。好きだからやるんじゃないのか？ 好きだから楽しくなるし、続くんだろ。ええっ!?」

**ママ**「アンタ、ちょっと飲みすぎよ！」

——息苦しくなって、ぼくは外に出た。タバコに火をつけて夜空を見上げた。

確かに、市役所は万能じゃない。予算にも、役割にも限度がある。

市民にも、いろいろな事情があり、十人十色の考えがある。税金だって、少ないほうがいいに決まっている。

じゃあ、何と何を比べて、だれが、どこで線を引けばいいのだろう。そして、その境界線を、どう守ればいいのだろう。

**「いったい答えはどこにあるんだ!! みんなはいったい、どう思ってるんだ!!」**

その言葉が、ぼくの頭の中を延々とかけめぐっていた。

遠くなる意識の中、ぼくはトボトボと家路についた…。

**※最終ページ「広報のつぼ」へ**